

# 対談 政令市静岡市で学生と中小企業の

## マッチングを成立させるには

安定した仕事に就けない新卒学生が20%を超える一方で、正社員を募集しながら予定人数を確保できない中小企業も数多い。このように若者の雇用が成立しにくい現状は、地方の存在を危うくする。人口の減少に直結するからだ。危機感を募らせる田辺信宏市長と、若者の就職活動に詳しいジョブエール代表取締役松本保美氏が打開策を話し合った。

〈企画制作／静岡新聞社営業局〉

# 静岡県で就職しよう!

## まず交流人口を増やす

松本：田辺市長は静岡市の人口減少について折に触れ発言されています。強い危機意識をお持ちですね。

田辺：そもそも日本は狭い首都圏に、権限、財源、情報が集中しています。この統治システムでは、もう国民の期待に応えられないことがはつきりしました。だから私は他の首長の皆さんとともに、地域主権を強く訴えています。

ただ地域主権と言っても、地域にそれを受け止める力がなくてはなりません。それが人口活力です。ところが、現在71万人余りの静岡市の人口は、3年後には70万人を割り込む見通しとなってきました。これにどう歯止めをかけるか。「最大の危機意識」を持って対応していかなければなりません。

松本：今や人口の減少は、地方共通の悩みになってきました。政令市といえども例外ではありません。ただ、苦しみの中から独自の工夫が見られるようになりまし。少子高齢化が基調の社会とはいえ、人口の減少は律に進



松本保美(まつもと・やすみ)氏  
岐阜県出身、1987年、慶応義塾大学経済学部卒。銀行、商社、メーカー、大学勤務を経て就職支援会社を設立。静岡市の事業仕分けの評価委員も務める。

むのではなく、取り組み次第で結果が変わっていくでしょう。地方の強い意志と豊かな発想が必要です。

田辺：残念ながら、定住人口を一気に増やす魔法の手はなかなか見つかりません。また財政状況の厳しい制約もあります。そうした中で市は何をやるべきか。

私は市長就任以来、静岡市に人を集める仕組みづくりを進めてきました。まずは観光客やビジネス客などの交流人口を増やす施策を充実させて、雇用の機会を創り出す。さらに訪れてくださった方々に市の魅力を実感していただき、いずれは住んでいただく。こうして定住人口に結び付けるというステップを描

## 「中小企業と学生がお互いの機会を日本に」(松本)

## 「進学で出た若者を戦略的に呼び戻す」(田辺)

いっています。

そこで、今年の1月には、美しい富士山の眺望を背景に、日本平において、本市初の本格的な国際会議となる国連軍縮会議を開催いたしました。また、日本で唯一「カンヌ市」と姉妹提携しているメリットを生かしたイベントである、「シズオカ×カンヌウィーク」の開催支援も継続しています。

松本：中山間地の魅力を発信した「オクシズ」の取り組みや、市役所前のスケートリンク設置も話題になりました。

田辺：ありがとうございます。今後は国際的な会議や展示会、見本市など国内外から多くの参加者が見込まれるイベントも積極的に誘致していきます。

## 雇用力を生かそう

松本：ところで、私が見る限り静岡市内の事業者はまだまだ採用意欲が旺盛です。学生の就職が決まりにくい状況なので頼もしく感じますが、実はマッチングはそれほど進んでいません。これが人口の減少に影響しているのではないのでしょうか。

全県ベースですが「5割の中小企業が目標人数を達成できずに採用活動を終了した」と、その裏付けになる記事が静岡新聞に載りました。



静岡市長 田辺信宏氏

株式会社ジョブエール代表取締役 松本保美氏



田辺信宏(たなべのぶひろ)氏  
早稲田大学政治経済学部卒、松下政経塾、市議、県議を経て2011年から静岡市長。

内企業の情報を持っていません。中小企業については社名も知らないと思っていたら結構です。

田辺：中小企業の課題はやはり企業の情報発信力が弱いことです。学生が社名すら知らなければ就職活動の対象になりません。昨年度は、松本さん、静岡新聞社・静岡放送グループほか多くの方々に協力いただき、「静岡市内企業と学生の縁結び」事業を実施しました。Facebook(しずまろ)以外に、3回のリアルな交流の場を設け、限定的ですが企業と学生相互の理解は深まりました。これを本年度も強化したいと考えています。

松本：確かに、ディスカッションやグループワークを通じて、学生と企業の方々の距離がぐっと縮まりました。このような場が拡大すれば、学生と市内の企業のマッチングは確実に増えていくと思います。



## 人柄のよい優秀な技術者となって、世の期待にこたえよ

沼津工業高等専門学校 柳下福蔵 学校長

私は沼津高専機械工学科の第一期生として、1962年に入学しました。その入学式で初代学校長であった井形厚臣先生は、「人柄のよい優秀な技術者となって、世の期待にこたえよ」と訓辞されました。井形先生は2年後に他界されましたが、遺訓は後に本校の教育理念に定められ、創立50周年を迎えた今でも変わりません。

思えば、先生は時代を予見され、技術者のあるべき姿を説かれたのでしよう。「人柄のよい」とは「相手のことを思いやる」ということです。相手を思いやれる人は、ユーザーや仲間とのコミュニケーションがうまくいく。独りよがりにならない。これは技術者に欠かせない素養です。そして「世の期待にこたえよ」は、「高い志をもち、人々の幸せに貢献せよ」ということです。目的を誤ってはならないという戒めでもあります。

今、日本のものづくりはかつてないピンチに陥っています。これまでの延長線上にある開発では、すぐにアジアの国々が追いついてくる。イノベーションが必要です。では何をすべきか。これもまた先生の遺訓に通じます

が、私は長い歴史と文化によって育まれた、「気遣い」や「きめの細かさ」といった日本人の「やさしさ」を製品に取り込んでいくことだと思っています。ここから他国がまねできない、日本オリジナルが生まれます。

県東部地域の企業も下請けでは生きていけません。本校には地域の科学技術の拠点としての役割が求められています。この10年来県東部の行政に働きかけた結果、昨年、全国的にも初めての2市2町による東部地域イノベーションセンターを開設することができました。この核となって、地域の中小企業から技術革新を巻き起こしたいと考えています。

さらに人材育成の要請にもこたえていかねばなりません。そこで現在、全国の7高専と日本工学教育協会、八王子商工会議所が推進する「KOSEN発「イノベティブジャパン」プロジェクト」(大学間連携共同教育推進事業・平成24年度から5年間)に参加し、イノベーションを支える人材の育成に取り組み始めました。成果は随時、教育プログラムに反映させたいと考えています。

ただ、まだまだハードルは高いですね。なぜなら、今の日本には学生と地域の中小企業が出会う仕組みがないからです。インターネットによる就職活動が定着して以来、学生は求人情報が公開されると「名前を知っている」有名企業に大量にエントリーするようになりまし。平均で70社くらいではないでしょうか。そしてこれら企業の会社説明会や試験に4カ月以上も費やしています。これでは地域の中小企業に目を向ける時間が限られてしまいます。

今の仕組みに乗っかっていては難しいでしょう。地方はもう独自の方式を考えるところになっていくと思います。

田辺：なるほど、背景にはそんな状況があるんですね。実は松本さんがおっしゃるような独自の取り組みも始めています。

たとえば私は「若者を静岡市に戻す」という戦略のついで、「一人づくり」を位置付けています。おっしゃる通り、まだまだ「大企業がいいブランドがいい」という価値観が若者を覆っています。親の価値観も影響しているでしょう。そういう環境ではいくら中小企業の魅力を伝えようとしたところで、聞く耳を持ってもらえません。

誇りとやりがいをもって仕事のできる条件は、規模や知名度ではありません。静岡市内には、有名な企業だけでなく、普通に生活していれば名前を聞くことはなくても、世の中に大きく貢献している企業がたくさんあります。地元にもそんな企業がたくさんある、と考えるだけでもワクワクしませんか。規模は小さくてもキラリと光る一流企業で、能力を存分に発揮できる。そういう選択肢がある。それは教育の現場で教えないければなりません。

これには、静岡市の教師をめざす若者を集めて立ち上げた静岡熱血教師塾が、力を発揮してくれるはず。まず塾生の成長を促し、その彼らが教師となって「一人づくり」に関わる。そんな将来像を描いています。

松本：今のお話は、まさしく「静岡市方式」ですね。私は数多くの学生と接する中で、静岡市を日本一学生の参加率が高いインターネットのまちにできないかと考えています。また学生と企業人の接触が普段から繰り返されるような、「縁結びカフェ」があってもいいでしょう。とにかく、学生と中小企業がお互いの機会を日本一充実させたい。これは静岡市への就職を促進するだけでなく、就学を促進するきっかけにもなります。つまり交流人口の増大ですね。

田辺：少し飛躍しますが、静岡市にきている留学生に静岡市内の企業で活躍してもらう仕組みづくりも考えています。以前の彼らの使命は、日本の教育を受けて母国に帰り、リーダーとなることでした。ところが今は卒業後も留学先でがんばるスタイルが一般化してきました。お互いのニーズが合致していますから、静岡大学をはじめとする市内の学校と提携しながら進めたいと思います。

松本：留学生の寮を日本人とのシェアハウスにする、おもしろいかもしれません。留学生の負担軽減になります。静岡市で働く際の不安が払拭されるのではないのでしょうか。日本人学生にもいい刺激になると思います。

田辺：こうして話をさせていただけると、また次のアイデアが浮かんできます。私は静岡市を「出会いのまち」にしたいんです。経営者と学生が出会えるまち、男女が出会えるまち。この先、自治体として婚活事業に取り組みするか、検討に入っています。これを政令市がやるからインパクトがあるんです。公の取り組みだという信頼感もプラスに作用すると思うんですね。別の機会に意見を聞かせてください。

松本：私も日本のインターネットのまちの次には、「日本働きやすいまち」を見据えています。雇用は地域の礎です。官民が一体となって実現しましょう。